国際歯科研究学会日本部会会報● Japanese Association for Dental Research

1998-2
August

Newsletter for JADR

Ⅰ. '98 Newsletter 第2報によせて

JADR 会長　黒田　敬之

エルニーニョ現象の影響でしょうか，今年は台風1号の発生が随分遅いようです。そのかわり，梅雨の合間の猛暑にはいささか辟易とさせられました。

Niceでの第76回IADR General Meetingも盛会裡のうちに幕を閉じ，5,000名を超える参加者を数えたというような噂を耳にいたしました。いずれ公式の発表が出ることと思いますが，日本からの参加者も発表演題が448題ということですから500名を超えていたのではないでしょうか。JADRの会員の先生方が活発にAADRやIADRで研究発表をされていることに対して，各国の研究者から高い評価が得られております。

Niceでの開会式において，大阪大学の岡田宏教授JADR次期会長がBasic Research in Periodontal Disease Awardを受賞されましたし，東京医科歯科大学の田上順次教授のもとで研究されたブラジルからの留学生のPartricia Nobrega Rodrigues Pereiraさんが Toshio Nakao Fellowshipを受賞されましたことは大変素晴らしいことでした。

Hatton Awards Competitionに関しましては，16 Divisionから37名の参加で行われましたが，残念ながら日本から参加された5名の方から第1位，第2位の受賞者を出すことは出来ませんでした。以前から指摘を受けていることではありますが，Research hypothesisのもと実験計画の論理性，実験方法のユニークさといった点を明確に打ち出す必要性に加え，英語による発表，それに続くdiscussionなど日本人の研究者にとって越えなければならないハードルの高さも感じさせられます。

今年のCouncil Meetingは，例年と比べ大変コンパクトな会議に変身しました。従来午前中かかって，細部にわたる報告事項が述べられ，午後に色々な協議事項が検討されていたのですが，Glantz会長，Schwarz事務局長の発案で，Section A, B, Cの3部構成になり，Section Aの報告事項は会議資料を読んでもらうということで済ませ，Section Bにすぐ入り，ここではいわゆる"Consent Calender"と称する特に採決などを必要としない，あるいは反対の意見の出そうもないような事項を座長の方から情報としてCouncilorに流すということで済ませてしまいました。次いでSection Cとして本来の協議が必要な，異なった意見や考えが出そうな事項，Councilの採決や承認が必要な事項が討議されるようになりました。おかげで会議が早く済み，午後の時間が十分に使えるようになりました。皆さんの賛同が得られて，来年からはこのスタイルが定着することになるようです。

会議の詳細は後載されております，岡田先生のご報告を参照していただきたいと存じますが，特に私からのご報告としては，昨年選挙がありました次期副会長に，AADRの元会長のUniv. AlabamaのDr. Marjorie Jeffcoatが就任されたということです。と申しますのもこの方が会長になられるのが，ちょうど2001年の時にあたるわけです。また，2001年のプログラム関係で色々関係が出て参ります2001年時の次期会長は，今年の秋ぐらいに来年度の次期副会長として選挙することになるわけですが，そのNomineesとして，昨年も出馬されていたUniv. of WalesのDr. Graham Embrey，現Australian/New Zealand Division会長のOtago Univ.のDr. Angela Pack，2003年のIsrael大会誘致に活躍したHebrew Univ.のDr. Harold Sgan-Cohenの3名が承認されました。本部役員の選挙の投票率が話題になりますが，母胎となるDivisionではその年の投票率が急に上がって30～40%位になってきますが，平均しますとここ5年では18%～27%位のもので，かなりの低率と言えます。従って，AADRに次いで会員数の多いJADRへは，各Nomineeからのアプローチが会期中からありました。選挙運動ということになるのでしょうか。

JADRから本部委員会の欠員に対する委員の推薦をいたしておりましたが，Edward H. Hatton Awards Committeeに柳下教授（医歯大），IADR/AADR Joint Publication Committeeに南雲教授（昭和大），Joint Technology & Communications Committeeに堤教授（京大）が正式に就任されることとなりました。既に委員をおつとめの川添教授(Constitution Committee)，大浦教授(Ethics in Dental Research Committee)，柳澤教授(IADR/AADR Joint Exhibit Committee)，恵比須教授(ICOB Planning Committee)，小林教授(Membership and Recruitment)，栗栖教授(Nominating Committee)，中林教授(Young Investigator Award Committee)，須田教授(Fellowship

Committee)の先生方同様ご苦労様ですが，ご活躍を期待いたします。また，昨今のタバコの害に対する健康管理の視点での色々なPromotionがなされていることから，IADRとしてもこの問題について検討するAd Hoc Committeeが設けられることになりました。

また，かねてからSectionとして参加していたEast and Southern African SectionとVenezuelan SectionがDivisionに昇格しました。これで18のDivisionとなったわけです。Sectionとして参加希望の出ていたWest Africaは書類不備として見送りとなりました。

Future Meetingとして，2001年の準備状況について報告を求められましたので，私が組織委員会の活動と今回のために用意していきましたポスターとMeeting anouncementを簡単に紹介しました。2004年の開催地はHonoluluということに決まり，2005年についてはSeattle，Baltimore，Philadelphiaが候補に挙がっていました。3年に一度北米外でということになっていたので，Australiaが2006年に対して意志表示の発言をしていましたが，このことでは多くのDivisionが開催したいという希望もあり，また，2年に一度にするかという意見も出て，まだはっきりしていません。

毎年話題になっていることは，Developing Country/ Regionへのサポートをどのようにするかということですが，学会参加費への援助，論文投稿への援助，出張指導，出張講演，器材等物質的援助など色々な方法が考えられるわけですが，今後Board meetingで，煮詰められていくことになりそうです。

今年の会期中のBoard meetingから，2001年のことがある関係で，Board Member-at-Largeとして，シンガポールのDr. Teo Choo Sooと小生がBoard memberに入ることになり，いささか冷や汗をかく量が増えてきました。こればっかりは，頑張りますとか努力しますとかではすまないことで，正直に言ってえらいことになってしまったといったところです。でも，今年は作田先生がPresidentで，1999年から2000年にかけてはImmediate Past Presidentとしていらっしゃるので“よらば大樹の陰”といった気持ちでいるのですが。

学会最終日の夜には，恒例のGlantz会長主催のPresident Receptionが開かれ，IADR会長のチェーンが作田先生の肩にGlantz会長から掛けられました。ちなみにこのチェーンはかつてSouth African Divisionから寄贈されたものだそうです。作田先生の会長就任にあたってのご挨拶も大変Vision溢れるもので，出席者から大きな拍手が起こっておりました。

さて，JADRに関しましては，昨年から発足しました評議員制度の機能の充実と懸案の役員選出規定の作成を今年度の目標にして理事会は動いております。この問題をかたづけて，次期会長岡田先生にバトンを無事お渡ししたいものです。JADRの在り方と学会の活性化につながる問題だけに，一朝一夕にはいかないことですし，一方ではIADR本部の規定との整合性も考えなくてはならないことです。

さらに，今後JADRでもIADRの各Research Groupに対応してResearch Groupの確立を図らなくてはいけないと考えます。歯科医学の研究分野が拡大してきている近年，研究プロジェクト毎のActivityが入会希望者に明確にされていることも大切なことと思います。IADR本部の活動との間も受け皿がはっきりしてくると思います。

今年も1999年度のHatton Competitionへの応募も締め切られ選考に入っているところですが，今年から診査基準の申し合わせをよりきめの細かいものにいたしました。しかし，なかなか専門外の研究の評価は難しいことですが，選考委員の先生方が出来るだけ客観的に評価できるように試行錯誤を繰り返すことになることでしょう。

JADRの会員の先生がIADR以外の学会から栄誉を受けられたことの情報もNewsletterで出来るだけお知らせするようにしていますが，昨秋，昭和大学の須田立雄教授がアメリカ骨代謝学会から1981年以降制定されたNeuman賞を受賞されました。また、名誉会員の三浦不二夫先生がアメリカ矯正歯科学会の最高権威であるAlbert H.Ketcham Awardを今年5月Dallasでのアメリカ矯正歯科学会において受賞されました。1936年に制定されて以来まだ70名弱の方しか受賞されてなく，アジアからは初めてのRecipientという大変素晴らしいNewsです。

今年の第46回大会は，既にご案内のとおり幕張メッセを使って11月28～29日に東京歯科大学高江洲教授の大会長で開かれますが，第47回大会は，大阪歯科大学大浦教授が大会長をお引き受けいただけることになっております。今年のNewsletter 1号で村山教授が提言されていました戦略的学際研究課題の設定による学術大会でのシンポジウムの企画など積極的な大会の姿勢を造り上げていきたいと思いますので宜しくご協力の程お願いいたします。あと残された期間で，将来に向かってJADRとして進んでいく方向とそれに対する具体的な戦略の基盤を整えることが出来ればよいと考える次第です。会員の先生方の一層のご協力をお願いいたします。

Ⅱ．IADR会長に就任して

大阪大学名誉教授　作田　守

去る6月24日～27日にフランス・ニースで開催されたInternational Association for Dental Research(IADR)の第76回総会で，Per-Olof Glantz会長の後任として第76代のIADR会長に就任しました。会長が着用するpresidential medallionは，6月27日夕方からLe Meridien Hotelの「Le Vallaurisの間」で行われたGlantz会長主催のPresident's Receptionで，多数の招待客の中Glantz会長から私の首に掛けられました。日本からは，JADR代表のIADR評議員である黒田敬之会長，中村亮副会長，岡田宏次期会長兼事務局長，IADRでそのほかの代表を務められる先生方，さらに，FDI会長の鶴巻克雄先生も参加して下さいました。有り難うございました。重責でありますが，大変名誉なことであり，また，光栄に存じている次第です。この機会を与えていただいたIADR会員特にJADR会員に感謝申し上げます。

IADRには，現在，口腔科学のあらゆる研究分野の最先端を網羅する20の研究グループがあり，18のDivisionsと5つのSectionsからなり，約12,000名の会員がおられます。IADRを創設し，ここまで充実発展させてこられた偉大な諸先輩各位のご努力に対し深甚の敬意と感謝の念を表わす次第です。来年3月にカナダ・ヴァンクーヴァーで開催される学会までの9カ月間，会長として本学会発展のためできる限り努力したいと思っています。日本部会の会員の皆様におかれましても，ご理解，ご協力を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

IADRでは，その使命として，歯，顎，頭蓋顔面領域の疾患の原因と治療，さらに予防に関する最先端の研究の推進に全力を挙げると共に，途上国における研究を定着させ発展させる計画を持っています。研究を始めるに当たっての企画についてはIADRが適切な予算をつけ，その後の継続的指導により研究の実質的成果を期待するものです。この企画は，単なる講演会や臨床技術の講習会の様なものでなく，口腔科学の発展に繋がる研究の芽生えになるものを考えています。従って，この目的を達成するためには，各途上国がどのような状況にあり，どのような内容のものを必要としているかの情報を収集する必要があります。ニースで開かれたIADRの理事会でそのためのTask Force Committeeが作られました。委員は，Southeast Asia, South Africa, South America, Eastern Europe, Indiaなどの地域からのメンバー，あるいはこれらの地域の事情に詳しいメンバー10人程から成っています。JADR会員各位におかれましても，これに関する適切な情報をお持ちでしたら，下記連絡先にお知らせ戴ければ幸甚です。

さらに，IADRはその他の関連機関との関係を密にし，進歩した研究の成果を世界の人々の口腔保健の向上に役立て，一生自分の歯で，しかも正しい咬合関係で，咀嚼機能を始めとする様々な口腔の機能を健全に営み，これが全身の健康の保持，増進にも貢献して，人々が質の高い生活を享受できるようになることを願っております。

昨年来，IADRがFDIに対してWorld Congress on Preventive Dentistry(WCPD)の開催に関するCo-sponsorshipを呼びかけておりましたところ，ニースで行われたIADRの評議員会の席上でFDIの鶴巻会長からFDIはこれに同意する旨の発言を頂きました。これにより，WCPDのOrganizing partnerには従来のIADR，WHOに加えてFDIが参画することになり，世界各地の口腔保健の現状の変化に対してより適切に対応したWCPDの開催が期待されることになります。この次のWCPDは2001年に中国で開催されることになると思います。数年前に福岡で行われたWCPDが好評であっただけに，今後もWCPDで活躍されるJADRのメンバーに期待する次第です。

さて，2001年にはIADRの総会が千葉の幕張メッセで行われます。今年行われたニースの次に北米以外の地で行われる総会になります。黒田敬之現JADR会長がLocal Organizing CommitteeのChairであるという立場から，Member-at-largeとして2001年の総会時までIADRの理事に加わられます。ニースでの総会が大変盛会であったことから，日本での総会も是非盛会であって欲しいと願っています。

JADRの研究レベルは高く評価されており，ニースでの総会で大阪大学の岡田宏教授がDistinguished Scientist AwardであるBasic Research in Periodontal Disease Awardを日本人で初めて受賞されました。大変お目出度いことであり，心よりお祝いを申し上げます。今後も，多数の受賞者が出ることを期待しております。

JADR会員が活躍される委員会の数も増えました。委員会からの提案はIADR自体の運営に大きな影響をもたらします。本学会発展のため，委員各位のご活躍を期待しております。

最後になりましたが，JADR会員の益々のご活躍，ご発展をお祈りいたしております。

もし，私に何か連絡されることがありましたら，下記にお寄せ下さいますようお願いいたします。

連絡先：学会センター関西　大戸道子宛
〒565-0082　豊中市新千里東町1-4-2
千里LCビル14階　Tel: 06-873-2301
Fax: 06-873-2300　E-mail: o-socie@bcasj.or.jp

（1998年8月3日記）

写真（提供：岡田事務局長）
左よりSchwarz事務局長，作田新会長，Glantz Immediate-Past President

Glantz博士はIADR会長職を作田新会長に引き継がれるに際し、次期会長としての1年間の労をねぎらうと共に、IADRの将来を先生に託し、以下のような賛辞を送られました。

Naturally, I have saved this evening's most important person for the last, Mamoru Sakuda. Thank you for being yourself. Your ability to combine deep knowledge with hard work, sincerity, and a desirable sense of humour has not only eased my burden, but in a very special way made my term in office something that I will always keep in fond memory. Dear friends, it is a first-rate scientist and a true gentleman that is now taking over the helm of the IADR. With Mamoru Sakuda in that position, we are in both good and experienced hands. It is therefore a particularly personal honour for me to hand over the official sign of the Presidency to you.

Per-Olof Glantz

（岡田事務局長記）

Ⅲ．第46回JADR総会・学術大会開催案内

大会長　高江洲　義矩（東歯大・衛生）

1998年度（平成10年）のJADR大会開催の第2回ご案内についてお知らせいたします。

会員の皆様並びに関係各位ますますご活躍ご発展のこととお慶び申し上げます。さて，本年度の大会は，2001年のIADR大会場となります幕張メッセの国際会議場の一部を今回の学会場として，多くの会員の皆様並びに関係者の方々にお出でいただきたいと願っております。

なお，大会日程の中に関連するプログラムについて最大の努力をいたしておりますので，下記の開催日程に，是非皆様ご都合をつけていただいてご出席下さいますようお願い申し上げます。

日　　時：1998年11月28日（土），29日（日）
場　　所：幕張メッセ　国際会議場
担 当 校：東京歯科大学衛生学講座
大 会 長：高江洲　義矩　教授
準備委員長：松久保　隆　助教授
内　　容：一般口演，ポスターセッション，特別講演，シンポジウム3題（歯列維持・歯質保護のメカニズム，口腔微生物と全身の健康，咀嚼システムの構造と機能），展示，その他

特別講演：
1）交渉中
2）Dr.Jin-Bom KIM (Pusan National Univerisity), IADR Korean Division

昨年のJADR総会・学術大会同様，本年度もAbstract Form等のJADR総会に関する書類は7月に各大学のJADR評議員のもとに郵送されております。歯科大学以外の方で書類をご希望の方は，第46回大会事務局（東歯大・衛生学講座，FAX: 043-270-3748），JADR事務局（担当：大戸道子，FAX：06-873-2300）まで直接お申し込み下さい。なお，書類（Abstract Form等）の締め切りは8月28日です。

宿泊・交通については(株)日本旅行幕張（新都心）支店（担当：草野/小高）にお願いしておりますので，ご利用を希望される方は11月13日までにご連絡下さい（FAX：043-297-2814）。

Ⅳ. JADR理事会報告

JADR事務局長　岡田　宏

Newsletter第1号ではJADR第45回総会，学術大会の報告（これはIADReport1998年度1号にも写真付で報告した）が，本号ではIADR第76回総会（Nice）の報告が中心にレポートされる。両総会の間に理事会は2回開催（1998年2月16日と4月20日）されているので，2回の理事会をまとめて報告したい。

1）JADRはIADRの韓国部会と1987年（時期は確認がとれていない）以来の定期的交流があり，毎回の自国の総会・学術大会に特別講演者として招待し合ってきた。この歴史は今年でほぼ12年にも及んでいる。今回は韓国部会の学術大会のメインテーマが「Present and Future in Molecular Biology for Basic & Clinic Dental Science」であった。理事会はこれを受けて栗栖浩二郎教授（阪大）に依頼し，「The Role of Genes in the Tooth Development」と題して招待講演が行われた。先生によると今回の第15回韓国部会のAcademic Sessionは上述したメインテーマに沿った特別講演が3題，シンポジウムが9題に及び，一般講演は口演56題，ポスター18題であって，盛会裡に終了したと報告された（詳細は本号のⅦ参照）。

2）IADR第76回学術大会（Nice）は盛会裡に終了した。日本人の演題申し込みが478題（会員299件，非会員179件），このうち30題がrejectされたとの報告があった。全体では3,364題の申し込みで，177題がreject，32題がwithdrawされた。日本からの演題にrejection率が全体の平均値より少し高い。演題は各々の選定委員会で審査され，IADR本部のプログラム部長が全体を統括される。また，演題申し込みの際，非会員が4割近くおられるので，IADR参加をご計画ならば早めにIADR会員になられIADR会員として演題を申し込まれることを是非お勧めしたい。その理由はrejectionされるなかにはAbstract Formの様式違反も含まれているからである。充分な情報を事前に得ておいてからの対応を切にお願いしたい。なお，IADRに入会されるに際してはまず本人が所属するDivisionの会員でなければならず（1997年本部会則改定），IADR会員にだけなることは出来ない。次年度のVancouverでの発表を予定しておられる方は早めにJADR事務局にIADRとの同時入会の手続きを取られるようお勧めしたい。

3）JADR第46回総会・学術大会は既にご案内済みであるが，本年11月28日（土），29日（日）の両日，幕張メッセ国際会議場で高江洲義矩教授（東歯，衛生）を大会長として，松久保隆助教授（東歯，衛生）を準備委員長として鋭意準備いただいている。大会長は早朝のbreakfast meetingをご提案いただいており，これは軽食をとりながら色々な研究情報等の交換に利用されることを目的とされている。希望される研究グループ（個人が呼び掛けられることも結構とのことです）がございましたら大会長に是非お申し出いただきたい。これを契機にJADR内にも将来研究グループが誕生してより活発化することを期待したい。

4）JADR第47回総会・学術大会（1999年度）は，大浦清教授（大歯大，薬理）を大会長として開催される。歯科医学研究の総合学会として学際的研究が年々活発化するとともに，他の領野に刺激され個々の専門領野が更なる発展を遂げることが期待されている。近い将来このような実績を踏まえてJADRが名実ともに国際的評価を揺るぎないものとすることができることを念じている。

5）永年にわたってJADR会員としてご活躍いただいた青野正男，桂暢彦，松江一郎，森本基，吉田定宏の諸先生方が名誉会員に推挙され，了承された。

6）名簿の改定年度をむかえ，今回はe-mail addressを併記し，情報化時代のコミュニケーションに役立てたい。

7）JADRの学際化をめざし，組織の民主化，活性化の起爆剤にと役員選出規程が再度討議されている。それは会長選挙にとどまらず，評議員の選出をも視野に入れたものなので，色々とご意見があれば頂戴しておきたい（宛先；岡田宏　Fax:06-879-2934）。

8）IADR第77回総会・学術大会（Vancouver）におけるHatton賞選考へのJADRからの候補者選考の応募が締め切られた。10件の応募を頂戴した。目下，全理事を審査委員とする選考委員会で審査中で（評価基準は数回にわたる理事会での討議の結果，研究の論理性，科学性，発展性などを基本に採点），次回の理事会（8月3日）で候補者（5名）が最終決定される。

9）JADRは日本歯科医学会の専門分科会の一つと認知されていないが，先輩のご尽力もあり，日本歯科医学会の国際関係支援団体との認知を受け，毎年日本歯科医学会から学会援助金を頂戴している。本年度も申請が受理，承認された。

10）IADRには理事会，評議会及び各種委員会があり，作田守先生がこれまで副会長，次期会長として理事会メンバーであられた。これからは会長として理事会を統括されるが，黒田敬之JADR会長も理事として就任された。また全部で12の各種委員会のうち，11の委員会にJADR会員が委員として活躍いただいている。（[　] 内は任期）

Constitution Committee：川添堯彬教授（大歯大）[1999]
Hatton Awards Committee：柳下正樹教授（医歯大）[2001]
Ethics in Dent. Res. Committee：大浦清教授（大歯大）[1999]
IADR/AADR Joint Exhibits Committee：柳澤孝彰教授（東歯大）[2000]
IADR/AADR Joint Pubulication Committee：南雲正男教授（昭和大）[2000]
ICOB Planning Committee：恵比須繁之教授（大阪大）[2000]
Membership & Rocruitment Committee：小林義典教授（日歯大）[2000]
Nominating Committee：栗栖浩二郎教授（大阪大）[2000]
Fellowship Committee：須田英明教授（医歯大）[2000]

Young Investigator Award Committee：中林宣男教授（医歯大）[2000]

Joint Technology & Communications Committee：堤定美教授（京大）[2001]

以上の他，J. Dent. Res. のPublication Committeeとして，村山洋二教授（岡大）が本部役員の委員に互して活躍している。

2001年には第79回IADR総会・学術大会が黒田敬之教授（医歯大）を大会長として運営されます。21世紀への顎顔面口腔科学の幕開けとなり，IADRの歴史に残るmile stoneとして成果を収められるよう，JADRも積極的に協力しなければならないと考えています（この件の報告は2001年IADR General Session準備状況の項にゆずります）。

Ⅴ．2001年IADR General Session準備状況

組織委員会委員長　黒田　敬之

第2回の委員会を平成10年2月23日，第3回を6月8日に開催いたしております。

さらに，6月26日にNiceのIADR総会時に，財務担当の須田委員，庶務担当の大谷委員さらにICS企画の坂東さんと私の4人が，IADR側から作田次期会長（当時），Schwarz事務局長，Collins事務局長補佐，Breckenridge総会担当事務局員の出席をえて，打ち合わせの会合を持ちました。これらのことについて，簡単ですが以下にまとめてご報告させていただきます。

1）組織委員会のもと小委員会を組織するために，組織委員の中で各小委員会の委員長をお願いした。

募金委員会　須田委員
広報委員会　岡田委員
企画プログラム委員会　大谷委員
会場運営委員会　奥田委員
宿泊旅行委員会　川添委員
接遇委員会　中村委員
登録委員会　茂呂委員
展示委員会　小林委員

なお，梅田委員，藍委員には，募金委員会，広報委員会に加わっていただきご助言をいただくことになった。佐々木委員には，広報委員会，企画プログラム委員会に参画していただくことになった。

2）Nice大会に向け，ポスター--ならびにMeeting announcementを作成することにしてデザイン等の検討に入った。（中型ポスター500部，Meeting announcement 2000部をNice大会でCouncil Meeting及び会場にて配布した。）

3）Korean Division, Southeast Asian Division, Australian/New Zealand Divisionから，Co-hostについて，前向きに協力する旨返事が来た。決定は各Divisionの次期Meeting時になる予定。

4）募金活動については，国際観光振興会への寄付金募集要望書を作り申請を行った。

5）後援団体として，文部省，厚生省，日本歯科医師会，日本歯科医学会，東京都歯科医師会，千葉県歯科医師会の他に日本歯科医学会傘下の各学会，その他の関連学会にもお願いしていくこととした。

協賛団体は，社団法人日本歯科商工協会8団体とする。

6）G-C社から2001年が同社の80周年にあたるので，記念事業としてIADRとの共催プログラムの申し入れがあった。しかし，この点については，LOCとしては，IADRのResearch Groupのシンポジウムをサポートする形を取って欲しい旨申し入れた。

以上が第2回，第3回の組織委員会での討議のまとめであります。第4回は，8月24日に開催されます。

次に，Niceでの打合会の報告をいたします。

会期中であったので，時間も限られ，約1時間30分の会談となりました。結論的には，LOCとして，日本での経費がアメリカ本土での5倍かかることから，極力国内参加者の数を増やすことを考えて欲しいということでした。一つの案として一般開業の先生方にも多く参加していただくために，例えば，one day pass, two day passのようなregistration方式など考えられないかという提案をし，今後検討してみることになりましたが，未だかつてないことですのでどうなりますか分かりません。

最も重要なポイントとして，IADR本部をとおして行うCommercial ExhibitionとLOCが，Science Transfer Programと抱き合わせで行うExhibitionをどのように分離しうるかということです。今後の検討課題です。さらに，G-C社からの申し入れの件については，IADR本部の考えとLOCの考えとの間にはかなりの違いがみられ，日本の感覚が理解できない面があり，LOC側は，この件に関する限り，IADRとG-C社との直接交渉にしてもらうことにしました。ポイントは，日本という場で行うけれど，学会はIADRの学会であること，従って掲示などの案内ボードにいたるまで，すべて本部が作って送り込むという姿勢です。今回のNiceのLOCの委員長を務めたDr. Goldbergやシンガポールの時のDr. Teoらからも IADR本部との色々な交渉には苦労することが多いといわれました。特に，作田先生からは，本部のFinancial Committeeが大変きつい意見を持っているので，日本の中での学会とはBoard Meetingの雰囲気も全然違っているので十分心するようにとご忠告を受けました。

何はともあれ，組織委員一同これから一つ一つ難関をクリアしていくべく努力いたしますが，JADRの会員の皆様の絶大なるご支援を宜しくお願いいたす次第です。

Ⅵ．第76回IADR in Niceの報告

A. Council Meeting報告

JADR事務局長　岡田　宏

IADR第76回総会・学術大会の前日（6月22日）に開催されました。会議の内容は作田守会長の“IADR会長に就任して”や黒田敬之JADR会長の“Newsletter第2報によせて”のなかでも触れられておりますので，出来るだけ重複を避けて報告したいと思います。会議も今回から半日で済みましたので大助かり，これも新執行部の進取の気概と，その卓越した事務能力の現れと思われます（旧執行部も素晴らしかったのですが）。

ちなみに新事務局長はEli Schwarz博士（前香港大学，Public Health Dentistry教授，Interim Dean），会計担当理事はJohn Stamm博士（Univ. North Carolina at Chapel Hill，歯学部長）［IADReport19巻1号，1997に博士のプロフィールが写真入りで掲載されています）です。

1）副会長の選挙結果は黒田会長のご報告にあります。次期副会長は選挙で投票をするのですから，会員数が2番目に多いJADRの動向はアメリカ以外のDivisionからは関心の的となっております。簡単なC.V.だけで人を選ぶことは大変困難でこの様なスタイルの選挙には通常関心が持てませんが，JADRをここ数年お世話させていただき，IADR本部と接触するにつけ，副会長選挙は重要なことと認識し，ヒトを選ぶ大切さを感じております。

2）Glantz会長は年次報告のなかで，IADR総会準備につき次のように述べておられました。参考までに要約しておきますと，第76回Nice大会の準備のため本部（Washington,DC）で2回，2日間に亘る会議が持たれ，その他執行部間でtelephone conferenceが2回行われ，11月11日の本部での執行部と本部事務職員とでのmedia training sessionを行って最終詰めを終えたと報告されています。

3）IADRの財政状態はいたって健全，良好であり会員の学術活動にとどまることなく，作田会長のご挨拶にもありますように，全世界の人々のQOLのレベルアップ，とりわけ発展途上国における疾病の治療や予防の向上に他の組織（NIDRやWHO，FDI等）と協力しつつ，活発な活動を展開しようとしています。すなわち，その国の学問の進展度合により，色々な支援体制が検討され，JDR等の刊行物の贈与，Local Divisionの年次総会，学術大会への参加の支援や，lecture programの提供，情報機材等の供与など色々な支援が既存のLocal Divisionを介して行われています。例えばNew Zealand / Australia DivisionやSouth-East Asia Divisionを介してVietnamやMyanmarに支援が計画されています。またHebrew-Univ.にはMiddle East Center for Dental Educationが創設され，活動を開始しました。このセンターもIADRやNIDRと協力しながら中近東のみならず全世界に門戸を開きたいという依頼が表明されました。また，中国はこれらの支援を従来より受け，近い将来IADRのChinese Divisionとしての参画が期待されるに至っています。このようにIADRは口腔保健の基盤となる成長した研究組織を全世界的に拡大すること，それがひいては人類の口腔保健に貢献する礎になるとのStrategyであります。

4）予算，決算が報告通り承認されました。財政のことは私も理解を越える部分がありますが，概略以下のように理解されます。1997年度のIADRの総予算は会員（企業会員も含む）の年会費を中心とする会計（年間約40万ドル，経費の上昇につれ，年会費が1999年より5ドル値上げされ45ドルになります）と，総会・学術大会会計（登録費や展示料金等が主要収入で約125万ドル）の都合，165万ドルです。総会・学術大会の利益はその20％が主催者に，10％が3）で述べましたRegional Oral Science Development Program等に利用されます。総会運営費の利潤を上げるため，次回より登録費が20ドル値上げされ，会員は215ドル，非会員は440ドルになります（本年のNice大会は特例で230ドルでしたが，2001年幕張も予定では230ドルとなっています）。ご参考までにこの数年間の参加人数と演題数を列記しますと，1996年シンガポール（2,281名，1,962題），1996年サンフランシスコ（5,106名，3,378題），1997年オーランド（5,210名，3,745題）でした。また，ちなみにICOBの予算は約21万ドルです（ICOBは隔年に企画されていますので，次回は2000年Washington,DC大会に計画されます）。

IADRの学術刊行物はJDR，Crit. Rev. Oral Biol.&Med.，Adv. Dent. Res.，Special Care Dent.です。IADRのofficial publicationであるJDRは，1991年に行われたIADRとAADRの取り決めで財政的にはAADRの所有になっていますので，IADRの予算的支援がなされていません。雑誌経営がご多分に漏れず大変厳しい状況であり，昨年購読料が48ドル（北米会員），55ドル（北米外会員-両者間に差があるのは北米会員はほぼ強制的に購読しているためです）が，総ての会員に70ドルと統一されました。JADR会員の購読者率は41％であり，決して他のDivisionに比べて高いとは申せません。ご支援をお願いしたいと思っています（またAdvan., Crit. Rev.等の購読料もいずれも10ドルの値上げが認められました）。なお，JDRのEditor，Herzberg博士の5年間の任期が3月で終わりましたが，再任されました。JDRのPublication Committeeのメンバーとして作田会長，村山洋二教授（岡大）が活躍されています。また，Crit. Rev.の購読者も570人に過ぎず，苦しい経営となっています。Adv. Dent. Res.は年4回のsymposiaのproceedingsとして刊行されています。

5）会員数は1998年1月現在で総数12,784名で，トップはAADRの5,929名，2番目がJADRで1,809名，3番目がContinental Europian Divisionの869名，次いでBritishの783名，Scandinavianの687名，Southeast Asiaの438名と続いています。JADRはこの数年間に500名近くの会員増をみせ，毎年のIADR総会・学術大会では500題近い多数の演題が発表されているのは大変喜ばしいことであります。そこでIADRでの学会発表を線香花火の

ように終わらせるのではなく，研究活動を継続的に続けられることを切望してやみません。そのためにも国内，外を問わず，活発な学際的な学術活動に発展させることを考えなければならないのではないでしょうか？ JADRがその足場として発展するよう努力してゆかなければならないと考えています。

6）AADRはIADRの一番大きなDivisionですが，IADRの機関誌のようなJDRの所有権を持ち，IADRの総会を2年続けて主催する（3年に1回北米以外の地で総会がもたれ，その年はAADRが北米でDivisional meetingを開催しているのはご承知の通りです）などから，IADRとの関係は密接です。現在JDRの財政を圧迫するものの一つとしてAADR以外のDivisionsのDivisional Abstractの刊行があり，その財源をどうするかがIADRとAADRの間で討議されました。その結果，IADRの学術大会の会計で賄うことになりました。このほか，総会・学術大会の開催に伴うその利益の配分等についても両者間で話し合いが行われています。

7）次年度以降の開催地と開催期日（予定）は読者の目に留まるよう再度ここに掲載しておきました。

1999年（IADR）：Vancouver（March 10-13）
2000年（IADR）：Washington,DC（April 5-9）
（ICOB）：？
2001年（AADR/CADR）：Chicago（March 7-11）
（IADR）：幕張（June 27-30）
2002年（IADR）：San Diego（March 6-10）
（ICOB）：？
2003年（AADR/CADR）：San Antonio（March 12-16）
（IADR）：Jerusalem（June 30-July 3）
2004年（IADR）：Honolulu

B. Hatton Awards Competitonに参加して

横関　雅彦（医歯大・歯・矯正）

今回初めてIADRに参加し，また幸運にもHatton Competitorとして発表する機会を与えていただいた。学会は，歯科に関連する様々な領域の発表がみられ，歯科に関係する基礎研究の分野の広さに圧倒された。また，様々な分野からの発表があったにもかかわらず各セクションごとに演題がまとめられていたため，興味のもてる発表は比較的スムーズに聞けたし，それぞれのセクションでは活発に討議がなされていた。

さらに，学会初日の夕方に行われたオープニングセレモニーは大変盛大で全く堅い雰囲気がなく，おそらく1時間半位だったと思うが全く飽きることなく参加できた。そのような雰囲気の中でも，何人もの先生方が歯学研究の向上を提唱していて大変academicな印象を受けた。

Hatton awards competitionは，Pre-doctoral部門13演題，Post-doctoral部門24演題でともに学会初日に審査が行われ，次の日のIADR/Unilever Travel Award Receptionで審査の発表が行われた。Post-doctoral部門の1位はM. Glogauer(Toronto Univ.)が"The role of ABP-280 in integrin-dependent mechanoprotection"で，2位はN. Slakeski(Melbourne Univ.)が"Identification of putative adhesion-binding motif in porphyromonas gingivalis cysteine proteinase genes"で受賞した。1位の演題は，細胞にテンションを加えると，アクチン結合蛋白であるABP-280が活性化，細胞骨格が発達することにより，細胞膜がテンションにより崩壊することを防止するというmechanoprotectionという概念を歯肉線維芽細胞とABP280を欠損している細胞株を用いて証明していた。また，2位の演題は，歯周病の進行に重要な役割を果たす*P. gingivalis*の3種類のシステインプロテアーゼをクローニングし，C末にその蛋白の接着に重要な領域が存在するということを分子生物学的手法を用いて証明していた。Hatton Awards competitionに参加していた演題はいずれもレベルが高く感じられ，生化学及び分子生物学的手法を用いた研究が多くを占めていた。また，審査の方法はpresentationが50%，質疑応答が50%で評価され順位が決定されるが，英語でのdiscussion能力の重要性を痛感した。日本からの受賞はここ10年なく，今後日本からの受賞が期待される。

C. 第76回IADRに参加して

西川　啓介（徳島大・歯・補綴）

関西国際空港からシャルル・ドゴール空港までAir Franceで約12時間，さらに国内線に乗り継ぎ1時間20分，同時期に開催されたワールドカップの影響もあってか国際線はほぼ満席状態，Niceまでの道のりは決して短くはありませんでした。しかし学会場においては多くの日本人の活躍を目にすることができました。

レジストレーションの始まる6月24日から最終日の27日までの4日間に発表された演題はシンポジウムやワークショップなどを合わせて3,226題，そのうち日本からの演題は515題でした。これは米国の1,066題には及びませんが，イギリスの637題に次ぐ，堂々たる数字だと思います。ただしオーラルセッションでの発表が82題と米国の483題に比べて極端に数が少なくなるのはご愛敬というものでしょう。日本からの発表が多かったポスター会場はレジストレーションやオーラルセッションの行われていた建物から歩いて10分ほどの位置にあり，IADRのポスター会場としてのご多分に洩れず巨大な倉庫のごとき建物でした。Niceという土地柄のせいか会場では比較的ラフな服装をしている人も多く，91年のアカプルコ大会を彷彿とさせるものがありました。開催期間中，午前中はやや曇りがちの日もありましたが，日が昇るにつれ好天となりIADRの主催する学会会場外でのイベントを楽しまれた方も多かったかと思います。

また，24日に行われたOpening Ceremoniesにおいては，IADRの次期会長である作田先生の，21世紀のIADRへ向けた抱負を語る堂々たる就任演説が行われ，JADRの会員の一人として誇ら

しく，また頼もしく感じました。学会活動自体についてはご承知のように膨大な内容ですので，プログラムおよび抄録集を参考にしていただければ幸いです。

余談ですが以前フロッピーディスクのような電子メディア形式でIADRの学会プログラムが入手できるという話を聞いたことがあったので，このレポートを書くための参考になればと，学会場の受付で問い合わせてみました。するとWeb Siteに行ってダウンロードしろというサイバーな答が帰ってきました。日本に戻って早速，試してみますと，インターネット経由で言われた通りにプログラムを手に入れることができました。IADRは毎年3,000題を越える数多くの演題が報告されますので，自分の興味のある演題を検索するためにこのような方法を使ってみることも一案かと思います。

D. シンポジウム "Understanding Age-related Changes in Muscle and Bone in Relation to Dentistry" に参加して

前田　芳信（阪大・歯・病院・総合診療）

本シンポジウムはGeriatric Oral Research, Implantology, Neuroscience/TMJ, Nutrition, and Prosthodonticsの各グループが共催して開催されたものであり，加齢が筋ならびに骨の構造ならびに機能にどのような影響を与えるのかについて，生理的，病理的，生化学的ならびに栄養学ならびに運動療法などの各角度からの歯科治療に関係する見解が提示された。

まずMcMaster UniversityのDr. McComasは，生理学的な研究の立場から筋，特に咀嚼筋の特性について解説した。ここで筋肉と加齢との関連での研究はそのほとんどが手足の筋を対象したものであり，咀嚼筋に関する研究がまだ数少ないことを指摘した。咀嚼筋では加齢に伴なって咀嚼筋の断面積や筋線維が減少し結合組織が増加する，全体として筋力が低下するなどの変化がみられる。また神経支配に関しても通常には筋力が増加すると参加するユニットが増加するが，60歳をこえると参加するユニット数は減少するものの代償機構もあり減少したユニットが分枝を出して互いに補うようになることもあるとした。

ついで，University of ArkansasのDr. Evansは栄養と運動（いわゆるトレーニング）との関係について全身的な立場から述べた。その中で，「必要な栄養あるいはカロリーを適切に供給しかつ消費する」ためにも適切な運動が必要であることを実験データとともに解説した。その中では，高齢者はよりたんぱく質を摂取する必要があること，トレーニングにより筋線維の太さが増加すること，またなんらかの疾病を有した人においてもその体力に応じたトレーニングが必要であるとした。高齢者においても，健康的とはいえない状態であっても安定した生活を長期に維持するために，さらに体重と運動量から，適切な栄養の摂取量と内容を決定することをも考えなければならないことを指摘した。

またState Unversity of New YorkのDr.Rubenは顎骨の構造が加齢と機械的な刺激によりどのように変化するかについて述べた。一般に加齢にともない骨密度（Bone Density)が上がり，それによって弾性を失い破折に対する抵抗力は低下する傾向にあり，顎骨は腸骨などよりもより密度が増加する傾向にあるとしたが，その意味でも機械的な刺激との関連が重視されることを強調した。

またUniversity of LondonのDr.Goldspinkの講演のなかでは，生化学的な観点から咬合挙上とgrowth factorの出現との関連について述べたが，逆に加齢にともなう咬合高径の低下はどのような影響を与えるのかが注目されるところである。

以上のように，加齢が筋や骨組織に与える影響については多くの知見があるものの，特に頭蓋顎顔面領域に関してはまだまだ十分に解明されていない点も多い。さらに今後の研究においては，単なる縦割りではなく今回のシンポジウムのように学際的な立場から，形態と機能との関連を重視した視点が必要になるものと思われた。

E. 各 Research Group の活動報告

1. Craniofacial biology group

小野　卓史（医歯大・歯・矯正）

昨今のIADR大会同様に今回のCFBGの発表内容は，geneあるいはmolecularレベルから臨床レベルまで多岐にわたるものであった。oral session 44題，poster session 98題を数えたすべての演題は，成長発育，遺伝／CLP／腫瘍，診断／治療評価，顎顔面形態／機能，細胞機能／ホルモン，歯の移動／萌出，先天異常，歯周組織などのテーマ別に分類されていたが，他会場における他グループの発表とも密接に関連するものが多数みられた。従って，大会参加者の興味の対象は，CFBGという従来のいわば縦系列から，Neuroscience/TMJやDental materialsあるいはMineralized tissueといった他のグループにおける関連発表という横系列に変化してきているように思われる。実際，筆者もNeuroscience/TMJと掛け持ちで参加したが，TMDのpathophysiology関連演題のoral sessionでは立ち見も出るほど参加者が多く制限時間を過ぎても席を立つ人も無く活発に質疑応答が行われ熱気が感じられた。内容的にはCFBGの演題と考えても良いものもありテーマの設定次第では別の視点から見た討論が可能になると思われた。今後は，他のグループとのco-sessionやco-symposiumが益々盛んに行われることに期待したい。CFBGのoral sessionは概して大人しく，特にAthéna roomでのsequenceは広い会場の割に聴衆が少なく演題と会場設定の在り方に問題を感じた。同じ時間帯に異なる会場で関連演題発表を行っている点も一因と思われ，再考されるべきであろう。一方，poster sessionでは，呼吸運動や姿勢と咀嚼機能との関連を論じた演題が興味を引いた。歯科矯正学の分野で話題のdistraction osteogenesis関連演題が非常に少ないのは意外であった。また今回は，分子生物学的手法を用いて顎顔面頭蓋における発生分化を明らかにする演題が数多くみられた。これらの研究では特定の遺伝子を欠くgene knockout mouseが用いられておりこのような実験動物を用いる傾向は今後一層強くなるものと思われた。

2. Periodontal research group

ー6月のNiceは熱く沸き返ってー

平野　裕之（阪大・歯・治療）

第76回IADR総会はサッカーワールドカップに沸くフランス南端のNiceで猛暑の中開催された。オープニングセレモニーでは，各部門の優れた研究者に贈られるDistinguished Scientist Awardsの授与式が行われた。歯周病学部門では大阪大学歯学部口腔治療学講座　岡田宏教授がその長年にわたる研究業績を認められ，Basic Research in Periodontal Disease Awardをペリオ部門の全研究者の中から受賞された。大会3日目に催されたIADRペリオリサーチグループのビジネスミーティングは，Dr. D. Kinane司会のもと，今後のペリオグループの活動方針について活発な討論が行われた。まず，今後のペリオグループに関する学会のうち，第11回ICPRの日程が1999年6月17日～19日に決定したとの連絡があった(abstractのdead lineなど詳細はIADRのWebsiteのペリオグループの項をご参照下さい)。今回の学会に関しての討論もあり，同一時間帯にペリオのセッションが重なり，非常に不便であるとの声が多く挙がったことから，シンポジウム，ワークショップ，セッションの適正な配置を学会運営に求める提言がペリオグループからなされるとの報告があった。また，歯周病学研究に功績著しい若手研究者に贈られるAnthony Rizzo Awardの1998年度受賞者が大阪大学歯学部口腔治療学講座　村上伸也講師に授与された。今回日本人研究者が相次いで国際的な学術表彰を受けたことは，わが国の歯周病研究の活動度と水準の高さをものがたっており，今後の研究活動の大いなる励みとなろう。

さて，歯周病学領域での研究発表では，歯周病原性細菌や炎症，宿主応答，GTR，インプラントなど，基礎から臨床に至る興味深い研究が例年にも増して多数発表された。中でも今回の学会では，近年のトピックスである「歯周疾患と全身疾患との関係」と「歯周病の罹患性の遺伝的背景」の二つのテーマについてのシンポジウムならびに一般演題が特に数多く見受けられた。糖尿病などは易感染性をもたらすことで歯周炎罹患と関連していることが知られていたが，動脈硬化症，虚血性心疾患，脳血管障害，更に低体重児出産なども歯周病罹患と密接に関与していることが報告された。また，後者では炎症性サイトカインであるIL-1遺伝子やFcガンマレセプター遺伝子の多型性，さらには細胞走化因子受容体遺伝子やVitamin D受容体遺伝子の多型性と歯周病との関連を示唆する発表が相次ぎ，従来単に体質という言葉で片づけられてきた「歯周疾患になりやすい」遺伝的背景が実際にDNAレベルで診断できる可能性が示された。どの研究も相当数の検体，対照群から解析しており，その努力と研究の姿勢には感服するものがあった。これらの方向付けは，今後数年間にわたる当該分野の臨床・研究の局面に大きな影響をもたらすと同時に，我々歯科医が口腔疾患に対峙する際に局所だけでなく，全身状態に配慮する必要が益々大きくなるものと思われた。

3. Neuroscience / TMJ group

砂川　光宏（医歯大・歯・保存）

1）Business Meeting

Nice大会のBusiness Meetingは，大会期間中の6月25日の午後5時からAcropolis Convention Centre, Gallieni 3を会場として，Group PresidentのDr. N. Capraの司会進行のもと行われた。まず，SecretaryのDr. T.T.T. Daoから1998年度の会計中間報告が行われ，会費の納入率が約30%である旨，及び6月25日現在の残高が$ 8,505.44であることが報告された。また，次期本グループのVice-Presidentの候補者を7月末まで募集中との連絡があった。次いで，Dr. Capraから以下の報告事項が説明された。1. IADR Nice大会並びにAADR Minneapolis大会の演題の採択状況について，特にNice大会の演題却下率は18.4%と高かったが，採択された136題の演題は12 sessionsに分けて発表されている旨，2. AADR Neuroscience officersではDr. Paul Robertsonがpresidentに就任すること，3. "Joint Document on Temporomandibular Disorders"が，Journal of Prosthetic Dentistryに掲載されること，4. 近くJDRのページ数が増加する可能性があること，5. 1999年のIADR Vancouver大会では3月10日に，Dr. G. LavigneとDr. J. Lundがorganizerとなってシンポジウム"Orofacial Pain: from Physiology to Clinical Management"が計画されている旨，6. "International Conference on Oral Biology (ICOB)"が，2000年にWashington地域で開催され，Dr. Pallaが"Molecular Neurobiology of Pain"をトピックとして取り上げること。これを受けて，Dr. Lundが，Vancouver大会でのシンポジウムの内容を卒前学生にも理解できる平易な内容にした単行本をQuintessenceから出版する予定であるとの報告を行った。また，Dr. Sessleから，IASPではオセアニア地区でシンポジウムを計画している旨の追加発言があった。その他，2000年～2001年のIADR並びにAADRのVice President候補者の募集が行われていること，1999 IADR Science Awardsのノミネーションの締切が1998年の8月であることが報告された。その後，Le Meridien Hotelに場所を移して，Neuroscience / TMJ GroupとPharmacology, Therpeutics, & Toxicology Groupの合同レセプションが，地中海を望む屋上テラスで行われ，メンバーの和やかな交流が行われた。

2）Oral & Poster Session

前節でも記したように合計12のsessionに分かれて136演題が発表された。詳しくは抄録集を参考にして頂くこととして，ここではごく簡単に各sessionの内容を紹介することにする。Seq#:15 Masticatoy Muscles: Physiology and Motor Control Mechanismsでは咀嚼筋筋活動の解析と咀嚼運動の発生機構について，Seq#:86 Orofacial Disorders: Evaluation and Treatmentでは主としてTMDの症候学について，Seq#:87 Experimental Neuroscienceでは顎運動の発生機構や顔面痛についての実験的研究の内容が，Seq#:106 TMD: Pathophysiology and Psychophysiological Assessmentでは顎関節症と顔面痛，ストレスあるいは睡眠との関係について，Seq#:177 Masticatory Muscle Functionでは咀嚼運動の発育における変化や咀嚼筋の活性等について，Seq#: 178 Orofacial

Disorders: Signs and Symptomsでは主に顎関節症の疫学的研究と顎関節症と顔面痛との関係について，Seq#:194 Trigeminal Sensory Systemsでは興奮性アミノ酸Glutamateの受容体やヒトの誘発電位などについて，Seq#:215 TMD: Etiology, Evaluation, Managementでは顎関節症と顔面痛及び睡眠時のbruxismとの関係など，Seq#:269 TMJ Pathophysiology, Hemodynamicsでは顎関節周囲炎症に関係する末梢神経機構と炎症関連酵素との関係について，Seq#:270 Orofacial Sensory-Motor Systemsではリズミカルな顎運動を誘発する実験系やその制御機構ならびに顔面領域の痛みを含めた感覚に関係する神経機構について，Seq#:271 Orofacial Painでは顔面痛についての神経機構についての基礎的ならびに臨床的研究について，そしてSeq#:289 Mandibular Biomechanicsでは下顎運動について様々な解析結果が，それぞれの研究者から発表された。それに対して活発な討論が繰り広げられ，多大な成果が得られたものと思われる。

4. Pulp biology group

川島　伸之（医歯大・歯・保存）

76th IADR Nice大会におけるPulp biology groupのbusiness meetingは、6月25日（木）午後5時より、現vice-presidentのDr. H.E. Goodisの司会で開催された。次期presidentに、Dr. K.M. Hargreaves, vice-presidentに東京歯科大学の下野正基先生が選出された。また，2000年にPulp biologyの国際会議を開催する方針が示された。この会議は幕張で開催されたProceedings of International Conference on Dentin/Pulp Complex 1995と同様，臨床から基礎までPulp biologyに関連する演題を幅広く取り上げる予定とのことである。開催地はCalifornia内の二地域が候補に上っており，5～6月頃が検討されている。

Oral and poster presentation

歯髄血流と痛み，歯内療法（材料、器具操作），歯髄における神経反応と微小循環，歯髄と根尖歯周組織の免疫反応あるいは炎症反応，歯髄の炎症反応と細菌，歯内療法と歯髄保存療法，象牙芽細胞・覆髄・生体適合性，歯髄における細胞外マトリックスと成長因子，の8つのセクションに分かれて68題の発表が行われた。研究技法として分子生物学的手法を用いた研究が数多く見られ，また対象となるメディエーターも多岐にわたっていた。臨床的な研究は残念なことにあまり多くなく，また新しい知見も少ないような印象を受けた。

1）歯髄血流と痛み：　レーザードップラー血流計を用いて血流を測定した研究を中心に9題の研究発表が行われた。レーザードップラー血流計イメージシステムの有用性に関する研究（Orchardson），レーザードップラー血流計のラット臼歯への適用に関する研究（Matthews），リン酸カルシウム沈殿物による象牙細管の封鎖性に関する研究（Suge），ソマトスタチンアンタゴニスト（Narhi）・CGRPアンタゴニスト(Berggreen)による歯髄血流の変化に関する研究などが注目された。

2）歯内療法における材料，器具操作：　逆根管充填剤，シーラー，根管洗浄剤，NiTiファイル等に関する10題の研究発表が行われた。ガッタパーチャに水酸化カルシウムを混入することにより抗菌性を持たせる研究（Lueders），シーラーのガッタパーチャへの接着性に関する研究（Tagger），レジンハイブリッド層が歯髄への細菌侵入を抑制する可能性に関する研究（Cox），NiTiファイルの根管清掃性に関する研究（Rosenberg）等の発表があった。

3）歯髄における神経反応と微小循環：　下歯槽神経切断による三叉神経節および歯髄におけるVIP発現（Fristad），ラバーダム使用による歯髄血流測定時のバックグラウンド減少効果に関する研究（Soo-ampon），酸エッチング処理といった象牙質表面の性状を変えることによるシュウ酸カリウムをはじめとする知覚過敏治療薬の象牙細管封鎖能の変化に関する研究（Ikola）の他，計10題の発表があった。

4）歯髄と根尖歯周組織の免疫反応あるいは炎症反応：　ヒト象牙芽細胞におけるClass II抗原発現（Levin），ヒト象牙芽細胞からのケモカイン産生（Levin），免疫抑制剤FK-506による実験的根尖病変の進展（Yamazaki），インシュリン非依存性糖尿病ラットにおける実験的根尖病変の拡大（Iwama），ラット根尖病変におけるIL-1と接着分子の発現（Matsumoto），ヒト歯髄の血管内皮における接着分子の発現（Sawa），う蝕を有するヒト抜去歯の歯髄における免疫担当細胞の動態(Sakurai)など14題の発表が行われた。

5）歯髄の炎症反応と細菌：　サイトカイン，ブラジキニン，接着分子，HSP発現等に関する10現(Holland)，P/E-Selectinノックアウトマウスにおける実験的根尖病変内への好中球浸潤障害および病変の拡大（Kawashima），4META/MMAレジンの低い生体刺激性と良好な封鎖性をラット臼歯に作成した人工的窩洞で調べた研究(Kamal)などの発表が興味深かった。

6）歯内療法と歯髄保存療法：　覆髄，断髄，根管拡大，逆根管充填，根管洗浄剤等に関する１５題の発表が行われた。Ishiwataらはレーザー光トモグラフィーを用いて歯の内部構造まで検出しうることを示した。

7）象牙芽細胞，覆髄、生体適合性：　歯髄細胞，象牙芽細胞に関して，あるいは覆髄，生体適合性に関して，14題の発表が行われた。象牙芽細胞と歯髄細胞の間に何らかの連絡があることをdye-coupling法により示した研究（Ikeda），ヒト歯胚由来の細胞は、種々の成長因子により分化，増殖を調節されていることを調べた研究（Hayashi）の他，覆髄モデルとしてのラットの有用性，アイオノマーセメント，コンポマー，レジン等の歯髄細胞に対する生体適合性，TGF?1のヒト象牙芽細胞におけるコラーゲン遺伝子の発現調節等の発表が行われた。

8）歯髄における細胞外マトリックスと成長因子：　歯髄におけるプロテオグリカン，オステオカルシン，リン蛋白，TGF?1等に関する10題の発表が行われた。ヒト歯髄細胞におけるオステオカルシンの発現（Fujita），象牙芽細胞様細胞のdentin sialoprotein, osteocalcin, osteopontinの発現(Hank)，ヒト歯髄の組織培養モデル，rhTGF?1の象牙質形成への関与，等の発表が行われた。

5. Dental materials group

中林　宣男（医歯大・医用器材研）

1998年6月24日から27日までの4日間，リゾート地として有名な南フランスのNiceで，第76回のIADRがヨーロッパ諸国のIADR部会と共催される形で開かれた。サッカーのワールドカップの予選と時期が重なったために，日本からの参加者を含め外国からNiceに行くのに多くの人が苦労したようである。国別の参加者の数は分からなかったが，アメリカ大陸で開かれるIADRに比べ，ヨーロッパからの参加者が多かったが，中近東やアジアからの参加者が多く，さすがに世界大会であるという感じを受けた。3月ミネアポリスで開かれたAADRの大会に比べて一部のアメリカ人はレベルが低いと批判的ではあった。提出されている演題に新奇性があるかというと問題点がないとはいえないが，国際的にはより多くの研究者と議論できた今回の大会の方が良かったと筆者は感じた。

何が悪かったのか分からないが，プログラムを知らずにIADRに参加する人のないようにしてもらいたいものである。開会式は24日の夕刻からであったが，講演発表は2時15分からスタートしており，これを知らずに参加できなかった人達のクレームが多かった。私もプログラムを手にしたのは当日の10時であり，12時からは会議に出席し，2時15分からの座長は厳しかった。おまけにこの時間帯に，Dental Materialsのセッションが5会場，そのうち象牙質への接着にまつわるセッションが3会場同時に組まれていた。顔見知りの座長と困ったものだと愚痴をこぼしながら，自分のセッションの客の入りを気にしながら始めざるをえなかった。例年だと参加者があふれるようなセッションであるのに参加者が少なく残念であった。これらの座長はいずれの会場でも議論を進める上で会場にいて欲しい人々であったと考える。かかるアレンジメントはプログラム委員に任されているのでとやかく言えないが，ポスター発表を除いてプログラムのオーバーラップと一つのセッションに関係の薄い演題を集めてあるように感じられるセッションも多く，責任者はもう少しアブストラクトの内容や，セッションにおける議論まで考えてアレンジして欲しかったと思う。

歯科材料あっての歯科治療であるだけに，歯科の研究の重要な位置をDental Materialsが担っているのは確かであるが，研究は将来を見据えたものである必要があることを考えると，未来展望に欠けているように感ずる研究報告も散見された。歯科材料の研究は，歯を削る道具，金属，ポーセレン，ポリマーを中心に進められてきたし，今日でも同じである。しかしその内容は年々変化しており，今年の演題では材料そのものの研究はほぼ姿を消し，接着に関係する演題が大部分であった。ただしCAD-CAMを生かした修復物の作成法の研究は時代の先端であるだけに幾つか目にとまった。日本では見られない演題であるが，変色歯の漂白は近年アメリカを中心としたトピックスである。美に対する欲求は理解するが，一時の審美性のみを求める傾向に筆者は抵抗を感ずる。

豊胸術に多用されたシリコーンの運命，バイアグラに群がる人々を眺めるとき，医療とは何かを深く考えさせられる。疾患によって喪失した乳房の再建に限ってシリコーン製人工乳房を利用していれば，おそらく問題なく今日でも医療に使われていたであろう。ところが人間の欲望を満足させるために使われるようになり，適用範囲を逸脱して使われ，結果としてトラブルに巻き込まれたと筆者は残念に思っているのである。シリコーンゴムの強度を考えたとき，シリコーン製の膜は破れ易く，シリコーンオイルがでてくることは想像に難くない。歯の漂白術ばかりでなく，学会での臨床報告を聞いていると，再生できない歯の組織を当然のよう削去して歯科材料の運命を議論する演題が多いことに胸を痛めるのである。1990年以前には想像も出来なかった研究も進んでいる。歯科材料の性質に合わせて再生しない歯を沢山削去した後に，材料を適用してそれの適否を研究する時代は終わったと思う。新素材を活用して歯を削る量を少なくする研究，抜髄，抜歯しなくてすむ治療法の研究などは，将来の歯科治療法を変革する大切な研究であると筆者は評価したいのである。レジン修復一つを取ってみても，接着を生かすか無視するかで，窩洞や支台歯の形態は変化するはずである。接着を生かすと修復物と歯の組織はお互いに補強しあい丈夫な構造体として機能できるのである。かかる研究報告が世界中から報告される日が一日も早く来ることを願う。接着歯学が世界に先駆けて芽生えた日本からの提案的な研究がもっとあってもよいのではないか。歯髄の保護に接着性レジンは有効か，臨床試験は難しいが世界に着実に広がりつつある日本からの提案であると評価したい。

Academy of Dental Materialsのシンポジウム「最先端機器を使ったバイオマテリアルの評価について」がIADRの直前の6月22日に同じ会場で象牙質への接着を中心に企画され，100人くらいの人が世界各国から参加した。両学会を通じて象牙質の接着は理解されてきているが，未だ混乱を感ずる。これは歯科材料が歯の外側で研究されてきた歴史があるために仕方のない側面もあるが，歯科材料は歯の治療にとって大切であり歯の組織の中で使うのであるという認識に早く立つことが大切であると筆者は考える。象牙質の接着は初期の頃には材料の研究（接着材にまつわる科学）が大切であったが，いまは象牙質とポリマーの複合体が大切であり，両者を同時に分析しなくてはならない。これを忘れて最先端の分析機器を駆使してもなんの解決策も生み出せないし，脱灰象牙質はコラーゲンから成るとしては象牙質接着の研究に混乱を導入するだけであることを主張したい。さらに，接着を十分理解しないで，簡便な接着システムに飛びつく愚かさも止めて欲しい。損をするのは患者である。

仲間同士で自前の研究会を企画することに反対はしないが，せっかく外国に来たのだから若い方々にIADRの楽しみ方の一つを提案したい。プログラムには大学時代の講義に登場する著名な先生や，抄読会やセミナーで名前を聞いたことのある研究者の名前があり，その人達の顔を直に眺めることが出来る。世界の研究のレベルを学んだり，他人の研究発表を聞きながらど

こが新しいか，研究の価値はどのくらいかを考えたり，学説で対立している研究者間の議論のやり方，研究発表の仕方，スライドやポスターの作り方，中には下らん研究だというコメントを聞くこともできる。俳優，音楽家やスポーツ選手の顔を覚えると，それらを観る楽しみが増える。学会でも同じニュアンスがあるのではなかろうか。次のIADRであのグループはどんな研究成果を持ってくるだろうか。自分も研究報告しに出かけて，それらの人の報告を聞こうと思うと，自然と研究に熱が入るのではないか。日本の学会でも若い方々に是非考えて欲しい楽しみ方である。

6. Prosthodontic research group

小川　隆広（九大・歯・補綴（UCLA・Reconstructive Biotechnology Center 留学中））

今回の第76回IADR総会での演題数は3,226題であり，北アメリカ大陸の外で行われるIADRとしては最大の規模となった。そのうちProsthodontic Research Groupに属する演題は165題であった。全体数に対する割合は5.1%である。この値については若干の減少傾向であることが気にかかる。もちろん，広義の補綴学に関連する演題は，他にも材料関連がDental Materialに，顎機能・咬合関連がNeuroscience/TMJやCraniofacial Biologyに，高齢者歯科・顎補綴関連がGeriatric Oral Researchに，そして文字どおりインプラント関連がImplantology Researchにそれぞれ多数分散しており，合計すると相当な数に上る。

Prosthodontics Research Groupで発表された演題は以下のように分類される（カッコ内は演題数を示す）。ポスト・コア（8），金属（3），セラミック（20），レジン・裏装材・充填・セメント（18），印象（5），インプラント（8），顎機能・咬合（31），歯牙・歯冠色・切削（8），組織（6），有床義歯（11），クラウン・ブリッジ（12），アタッチメント（3）。もちろん，これらの中には複数の分野のトピックを含む演題も多数存在し，その場合，分類することが困難であった。本稿では私の判断で分類させて頂いた。この他にも，CAD-CAMなどといった先端技術に関する演題が発表された。

補綴学関連のシンポジウムとして，Understanding Age-Related Change in Muscles and Bone in Relation to Dentistryが開催された。このシンポジウムはProsthodontic Research Groupの他，Geriatric Oral Research, Neuroscience, Nutrition, Implantologyのグループの協賛で行われた。

次に，Prosthodontics Research Group Business Meetingについて報告する。今回は約25名が集った。以下に，その概要を報告する。

1）Krishan Kapurが1998年のIADR Prosthodontic Award受賞者として認められた。

2）Prosthodontics Research Groupへの演題応募数は169題であり，そのうち取り下げが1題，他のグループへ回されたのが10題，逆に他のグループから回されてきたのが10題であった。最終的に採用された演題数は，ポスター113題，オーラル52題であり，合計165題であった。4題がrejectされ，reject率は2.3%であった。この値は例年と比べて，また他のグループと比較しても高い値ではない。

3）演題の地域別内訳はヨーロッパが最多で60題，続いて北アメリカ50題，アジア44題，南アメリカ7題，その他であった。

4）JDRにはこの1年で400の投稿があり，内訳はclinical: 39.4%，materials science: 21.1%，biological: 39.4%であった。採択率は32.6%であった。

ミーティングの後の恒例のレセプションは終始なごやかに行われた。

Ⅶ．ＩＡＤＲ韓国部会に参加して

栗栖　浩二郎（阪大・歯・解剖）

今年1月22日より25日まで，作田先生(当時IADR次期会長)と私は，IADR韓国部会(KADR)の招きを受けてソウルを訪問した。到着の空港では，ソウル大学歯科放射線科D.S. You教授，矯正科D.S. Nahm教授らの出迎えを受けた。人なつっこい笑顔のNahm教授とは，昨年秋の徳島でのJADR以来の再会であった。昨年暮れ以来の韓国の経済危機については，日本でもよく報道されているが，やはり街は2年前の訪韓のとき程の活気は感じられなかった。この時期のソウルは年間で最も寒い時期で，日中でも零下10度前後と，大阪と比べて極めて厳しい寒さであったが，われわれに対するKADRの先生達の歓迎は誠に暖かかった。到着の夜は，KADR会長C.W. Kim教授，名誉会長J.H. Kim先生など，KADRの執行部方々による宴が催され，万事にわたってIMF関連の締めつけの厳しい中にもかかわらず，誠に丁重な歓待を受けた。

KADR総会は，23日より2日間，ソウル大学で行われた。初日は，午前10時よりOpening Ceremonyが開かれた。参加者は少なかったが，Kim会長，作田IADR次期会長など4氏の挨拶があり，JADRに比べてかなりformalに運営されている印象を受けた。

特別講演は，以下の3題が行われた。

1) ソウル大学歯学部解剖学講座M.K. Kim教授の"Present and future of dental research in Korea"。韓国では，1992年以来30余の歯科分野のプロジェクトが文部省の基礎医学研究助成金を受けているが，国際的なJournalに掲載された論文はまだ少ない。21世紀には，分子生物学，分子遺伝学の進歩が，歯科学の研究や歯科医療に急激な変貌をもたらすと予想されることが述べられた。

2) 今回招待された私の"The role of genes in the tooth development"。マウスの歯の発生におけるHGF，PTHrP，Shhなどの遺伝子の役割を，培養歯胚を用いた遺伝子発現の抑制実験の結果に基づいて考察した。

3) Pohang科学技術大学H.S. Shin教授の"Transgenic techniques and molecular biology"。この中では，外来遺伝子を動物の染色体に導入するトランスジェニック技術は，生命科学分野の研究において極めて有用な手段となっていることが具体例を用いて解説された。

シンポジウムでは，1. Molecular biology in dentistry (Basic), 2. Molecular biology in dentistry (Clinical)の2つのテーマが取り上げられていた。今回のKADRは，全体として分子生物学をキーワードとして計画されたものと考えられる。

一般口演およびポスター発表の演題は，それぞれ56題，18題で，分野別では，歯科材料，診断法，口腔外科，補綴，歯周組織，神経，硬組織などが主なものであった。

韓国の現在の経済状況は，しばらくの間，生命科学の分野においても研究の展開に大きな障害になるかもしれない。しかし，若い研究者は着実に育っており，研究のレベルは近い将来わが国や欧米に近づくものと思われる。

滞在2日目の夜は，青瓦台の裏山の中腹にある迎賓館風のレストランでのKADRの関係者の方々約20名が参加した宴会に招かれ，ソウルの美しい夜景と韓国風料理を堪能させて頂いた。また，今回の訪問では，学会のあい間をみて，博物館や大学構内を案内していただくなど，誠に手厚いもてなしを受けた。とくに，大阪歯科大学歯科放射線科に留学経験があり，大阪大学歯科放射線科とも交流の深いYou教授には，われわれのソウル滞在中つきっきりでお世話頂き，深く感謝している。

帰国の日の朝は殊に冷え込みが厳しいく，漢江の一部が凍っていた。今後，日韓の研究者がさらに交流を深め，友好関係が一層発展することを願いながら，ソウルを後にした。

Ⅷ. 岡田　宏教授 1998 年 Distinguished Scientist Awards 受賞

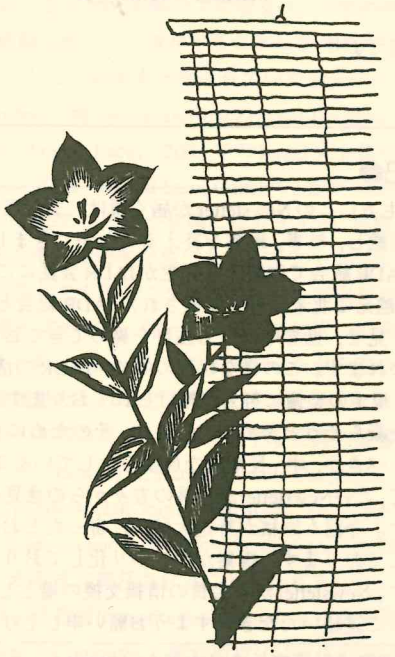
この賞は，本年度第1号のIADReportにも募集要綱が2ページにわたって掲載されているように歯科医学の研究領域の14の専門分野で卓越した業績を上げた研究者が毎年各分野ごとに1名づつを選出して授与されます（さらに，いずれかの専門分野で特に優れた研究業績を上げた36歳以下の若手研究者1名にもYoung Investigator Awardとして授与されます)。

今回，日本人として初めて岡田教授が受賞されたBasic Research in Periodontal Disease Awardは1965年に設立され，「歯周病におけるすぐれた基礎研究もしくは基礎研究により裏付けされたすぐれた臨床研究を成し遂げた研究者に贈られる」歯周病研究の分野で最も権威ある賞の一つです。世界の歯周病研究の指導的立場にある著明な研究者が歴代受賞しており，今回の岡田教授の受賞は免疫学的および分子生物学的手法を積極的に導入した歯周病の病態解明とその診断への応用や歯周治療への薬剤局所搬送システムを利用した化学療法の開発，歯周組織再生法の開発などに関する一連の研究成果が高く評価されたものです。なお，贈呈式は6月24日フランスのニースで開催された第76回IADR総会の開会式の式場にて行われました（村上伸也　阪大，JADR庶務幹事)。

Ⅸ．事務局だより

1)今年は3年に一度の会員名簿発行年にあたっております。会員の皆様へは過日郵送にて調査アンケートを実施いたしましたが、住所や勤務先、氏名等の変更をまだ事務局へご連絡されていない会員は至急事務局へ変更連絡をお願いいたします。

2)IADRのホームページ[http://www.iadr.com/]に早速"Memories from IADR's 1998 General Session"としてIADR Nice総会の報告がアップされております。作田新会長のOpening Celemony Speechもsoundでダウンロードすることができます(Real Audio softをinstallする必要があります)。その他にもIADR関連の情報を入手することができますので、一度アクセスされてはいかがでしょうか。



CONTENTS

Ⅰ. '98 Newsletter 第2報によせて 1

Ⅱ. IADR 会長に就任して 3

Ⅲ. 第46回JADR 総会・学術大会開催案内 4

Ⅳ. JADR 理事会報告 5

Ⅴ. 2001年 IADR General Session 準備状況 6

Ⅵ. 第76回 IADR in Nice の報告

A. Council Meeting 報告 7

B. Hatton Awards Competition に参加して 8

C. 第76回 IADR に参加して 8

D. シンポジウム "Understanding Age-related Changes in Muscle and Bone in Relation to Dentistry" に参加して 9

E. 各 Research Group の活動報告

1. Craniofacial biology group 9
2. Periodontal research group 10
3. Neuroscience / TMJ group 10
4. Pulp biology group 11
5. Dental materials group 12
6. Prosthodontic research group 13

Ⅶ. ＩＡＤＲ韓国部会に参加して 14

Ⅷ. 岡田　宏教授 1998年 Distinguished Scientist Awards 受賞 15

Ⅸ. 事務局だより 15

Ⅰ. A message from the JADR president 1
Dr. Takayuki Kuroda: President of JADR

Ⅱ. A message from the IADR president 3
Dr. Mamoru Sakuda: President of IADR

Ⅲ. Announcement of the 46th academic meeting of JADR 4
Dr. Yoshinori Takaesu: The Chairman of the 46th academic meeting of JADR

Ⅳ. Reports of the meeting of the board of directors of JADR 5
Dr. Hiroshi Okada: Executive Director of JADR

Ⅴ. Reports from the local organizing committee (LOC) of the 79th general session of IADR in Japan (2001) 6
Dr. Takayuki Kuroda: Chairman of LOC

Ⅵ. The 76th IADR meeting in Nice

A. Reports of Council Meeting 7
Dr. Hiroshi Okada: Executive Director of JADR

B. Reports of Hatton Awards Competition 8
Masahiko Yokozaki: Tokyo Medical and Dental Univ.

C. Reports of the general session 8
Keisuke Nishikawa: Tokushima Univ.

D. Reports of Symposium "Understanding Age-related Changes in Muscle and Bone in Relation to Dentistry" 9
Yoshinobu Maeda: Osaka Univ.

E. Research Group Activities

1. Craniofacial biology group 9
Takashi Ono: Tokyo Medical and Dental Univ.
2. Periodontal research group 10
Hiroyuki Hirano: Osaka Univ.
3. Neuroscience / TMJ group 10
Mitsuhiro Sunakawa: Tokyo Medical and Dental Univ.
4. Pulp biology group 11
Nobuyuki Kawashima: Tokyo Medical and Dental Univ.
5. Dental materials group 12
Nobuo Nakabayashi: Tokyo Medical and Dental Univ.
6. Prosthodontic research group 13
Takahiro Ogawa: Kyushu Univ.

Ⅶ. A report of the KADR general session 14
Kojiro Kurisu: Osaka Univ.

Ⅷ. Professor H. Okada awarded the Distinguished Scientist Awards in 1998 15

Ⅸ. Announcement from JADR secretary office 15

●編集後記●

会員の先生方にこのNewsletterが届く頃は、まだ残暑の厳しい頃かと存じます。今回も多くの先生方のご協力とご理解を賜り多数の玉稿を頂戴し，無事，編集を終えることができました。この場をおかりしてあらためてお礼を申し上げます。6月のニースで行われましたIADR総会で作田　守先生がIADR会長にご就任され，いよいよそのリーダーシップを発揮されます。Nice大会は参加者が5,000名を越える北米以外で開催されたIADR総会としては最大の規模となりました。IADR総会における日本人研究者の活動は年々高まりを見せ，世界中からも注目を集めてきております。2001年のIADR東京大会に向けての準備もますます多忙を極めてくるものと思われます。この様な状況の中で，JADRの活動をより開かれた，かつactiveなものとするために，評議員制度の充実に加え，役員選出規定の整備に努力が続けられております。又，JADR総会・学術大会も参加者にとってより実り多いものとなるような企画に工夫を凝らそうと努めております。そのためにもJADR学術大会がそのinterdiciplinaryな特徴を生かして今後どの様に活動を展開していくべきか，中・長期的な展望を示していくことが求められているように思います。学会としての学術誌を持たないJADRにとりまして，このNewsletterが会員の方々からの意見を自由に交換していただける場として利用していただきますことを心より念じております。今回も原稿が特定大学に片寄ったとお叱りを受けるかもしれません。これは編集方針ではなく，広く先生方のご投稿をお待ちしております。編集がマンネリ化しておりますが，今回は若い先生方より原稿を頂戴したことはせめてもの救いと感謝申し上げます。Newsletterが学会員の情報交換の場として活用されることを切に願っております。どの様なご意見ご感想でも結構です。下記までご連絡いただきますようお願い申し上げます。

発　行　国際歯科研究学会日本部会（JADR）
連絡先：〒565-0082 豊中市新千里東町1-4-2　千里LCﾋﾞﾙ14階　学会センター関西内　FAX 06-873-2300　担当：大戸
JADR事務局長　岡田　　宏（大阪大学歯学部口腔治療学講座）　連絡先：〒565-0871　吹田市山田丘1-8　FAX 06-879-2934
1998年8月20日　発行